

保育者養成校における歌唱指導に関する研究

A study on the teaching of singing in the nursery school

松田扶美子 (有明教育芸術短期大学)

Fumiko MATSUDA (Ariake College of Education and the Arts)

(キーワード)

歌唱指導、音楽教育、子どもの歌

1. 本研究の目的

保育者を目指す学生にとって、歌唱能力を身につけることはとても重要である。子どもは保育者の声、歌を通して音楽の楽しさを体感することができる。しかしながら日常では、携帯機器などでコミュニケーションが成立してしまい、声を出す機会が減っていると感じる。養成校における「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」の授業では器楽合奏、和楽器の演奏のほか、歌唱の指導も行っている。子どもたちの前で音楽は楽しい、歌は楽しい、ということを共に感じるためにはまず、保育者を目指す学生自身が楽しむことが必要である。

本稿では、「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」の授業を通して、質問紙調査を行い、歌唱の現状と問題点を探り改善をはかる。

2. 質問紙調査からの結果

質問紙調査はA短期大学生の1.2年生を対象とし、おこなった。質問紙調査の結果として保育者を目指す学生の声域は一点ハから二点二までが一番多く、二点二の音より上の音になると一オクターブ下に声を無意識に下げてしまうという学生が2割近くいた。二点ホの音からは声の喚声点があり、出しにくい声域である。目指す声としてはお腹から出る声、ハッキリと通る声、高い声が多かった。2年生の6月、11月に2回実習に行くため、1年生よりも2年生の方がよりなりたい声のイメージがはっきりとしていた。しかし、今の声をどうすれば、なりたい声に近づくのか。すぐに声は変わらず、怒鳴り声、大きな

声を出し、声がガラガラになっている学生や保育者がいる。一度声をこわしてしまうとなかなか治らないのが現状である。

3. まとめ

授業の中で1人1人、改善点としてそれぞれ必要なことをアドバイスし、8割の学生に声の改善が見られた。息漏れが原因の場合は声をあつめるため猫の鳴き声(ニャー)、遠くまで響かせるためには硬口蓋をしめるため、カラスの鳴き声(カー)、言葉を前に出すには唇より前に音を出すイメージをつけるため羊の鳴き声(メー)、胸が詰まったような感じがし、声が出ない学生には犬の遠吠え(ウォーン)を行い、体全部で声を出すように指示を行った。その他にも蟬のミンミンや赤ちゃんの鳴き声など、各自必要な真似を提示することにより、歌の知識がなくてもイメージをして声を出すとすぐに改善されることが分かった。頭で音をとらえるのではなく、思い描いた動物の鳴いている様子をイメージし、声を出すことにより、様々な問題点が解消することが分かった。現代の子どもの歌は音域が高く、二点二の音が出てくる。学生一人一人に合った個人レッスンを行うことで学生一人一人の音域が広がり、出しやすくなる。一人一人違う楽器である声、一生つきあう声と向き合い、自分の声を知り、大事にケアしていくことはとても重要である。今後は1人1人の声のカルテを作成し、研究していきたい。